小堀正一　篇1

茶人　小堀正一

今月からは、宇陀松山城跡の最後に携わった人、小堀正一について見ていきたいと思います。正一は、天正7（1579）年に近江国（滋賀県長浜）で生まれました。

正一の父は、小堀正次といって戦国時代の滋賀県北部を治めていた浅井家に仕えており、浅井家がなくなった後、出家していましたが、しばらくして還俗し（一般人になること）、豊臣秀長（秀吉の弟）の家臣にとして仕え、正一も身の回りの世話役として秀長に仕えたようです。

秀長は、1585（天正13）年から大和国（奈良県）などの関西近辺を支配しており、郡山城（大和郡山市）に住んでいました。正一も父とともに郡山の城下町に住んだようです。このころから正一は大和国と縁があったといえるでしょう。正一は、秀長家臣時代には茶人として有名であった千利休とも出会い、千利休の弟子古田織部に師事し、茶の教養を深めています。茶の湯は、日本伝統的な作法で湯を沸かし、茶をたて客をもてなす儀式で安土桃山時代には現在の原型ができており、大名や商人の社交の場・政治的折衝の場でした。正一は、茶会に頻繁に参加しており、茶人としての基礎を築いたのではないでしょうか。

天正19（1591）年、秀長が病死した後もしばらくは豊臣家に仕えていました。1600（慶長5）年、関ヶ原合戦が起きると徳川家康に従い、戦後、備中国（岡山県）1万4千石ほどを与えられました。備中国奉行職と難攻不落で有名な備中松山城（岡山県高梁市）が与えられました。

次回は父とともに備中松山に赴き、本格的に文官として活躍するところから見ていきたいと思います。